

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23510333

研究課題名(和文) 移民コミュニティの動態に関する研究：マレーシアのインドネシア人学校の変遷を中心に

研究課題名(英文) Social Transition of Immigrant Community: the Case of Indonesian Schools in Malaysia

研究代表者

西 芳実(Nishi, Yoshimi)

京都大学・地域研究統合情報センター・准教授

研究者番号：30431779

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円、(間接経費) 1,230,000円

研究成果の概要(和文)：地理的・文化的な近接性のある二国間での移民の送り出し/受け入れをめぐる諸問題について、マレーシアにおけるインドネシア人学校の変遷を主要な事例として、移民の子弟の教育という観点から受け入れ社会における移民の社会統合過程を検討した。同一国内であっても民族混成状況、労働形態、移住時期に地域差がある点を踏まえて、マレーシアにおけるインドネシア人子弟の教育やインドネシア人コミュニティの社会的地位の変遷を整理し、分析した。

研究成果の概要(英文)：This project has examined the social integration process of immigrants who come from neighboring country with the geographical and cultural proximity, in terms of education of children of immigrants, by taking a major case of Indonesian school in Malaysia. Regional differences in ethnic distribution, work arrangements, and migration period, are observed to influence social status of Indonesian immigrants and the pattern of development of Indonesian school.

研究分野：地域研究

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：移民

1. 研究開始当初の背景

国境を越えた人の移動や居留国と別に出身国を持つ人々の存在(たとえば中国系アメリカ人や在日フィリピン人労働者)については、「移民問題」(居留国における国民統合上の問題)あるいは「ディアスポラ」(故地を失った人々)といった観点から従来捉えられてきた。また、冷戦後の状況と関連して、移住先で国民待遇を受けながら出身国の民族運動や政治運動に参加する人々の動きは「遠隔地ナショナリズム」と名づけられ(ベネディクト・アンダーソン)権利を主張し義務の遂行を免れる無責任な主体として評価されてきた。これらはいずれも、一人の人にとって拠り所となる故郷は一つであるとの考え方を前提にしており、このことが、人はひとたび「故地」を離れるとその存在が居留国・出身国双方にとって「問題」と認識される状況を再生産しているともいえる。

これに対して、近年、二つ以上の地域に対して帰属意識(アイデンティティ)をもつ人々が登場し、出身国と居留国の双方に対して積極的に関与する事例が報告されている

また、植民地期や国民国家形成期においては、留学などで域外に拠点を置く「移民」が出身地域の民族主義運動の発展を促したことや、域外に出自を持つ「移民」が居留国の社会秩序の形成に大きな役割を果たしたことが指摘されている。これらはいずれも「移民」を出身国・居留国双方において積極的な貢献を果たしうる存在として評価する試みであるといえる。

研究代表者は、これまでインドネシア・アチェ州を主たる研究対象地域として、災害からの復興や地域紛争の解決に関する研究を行ってきた。アチェ州は、1976年以來、インドネシアからの分離独立を求めるアチェ紛争が続いてきたが、2004年12月のスマトラ沖地震津波の最大の被災地となったことを契機に、自然災害からの復興と地域紛争の和平プロセスが同時に進行した地域である。研究代表者はこのことについて、災害からの復興や紛争解決の過程において、被災地(紛争地)と周辺諸地域との間で人やモノが移動する経路のあり方が重要であることを指摘した。

中でもマレーシアはアチェとの間で古くから人的交流があり、アチェ出身者がマレーシアでマレーシア国民として社会的に重要な役割を担っていた。このことが、マレーシアのアチェ州に対する救援復興活動を支えていた。このことを踏まえて、アチェ人のマレーシアへの移住が送り出し地域であるアチェ社会にどのような影響を与えたかを研究した。

本研究では、これらの研究を発展させ、移民の受け入れ地域であるマレーシアにおいてインドネシア人移住者がどのような社会的影響を与えているかを調査し、社会秩序の再編過程における移民の役割の総合的な把

握を試みた。

2. 研究の目的

マレーシアにおけるインドネシア人コミュニティの形成・再編過程について、マレーシアにおけるインドネシア人の待遇改善を求める動きがマレーシア社会を構成する他のコミュニティとの関係に及ぼす影響を検討する。具体的には、マレーシア国内を以下のそれぞれの特徴を持つ二つの地域にわけた上で、それぞれの地域におけるインドネシア人コミュニティの置かれた環境やその変容の過程を明らかにする。

(1)東マレーシア(サバ州)

隣接するインドネシア東部地域から歴史的に人の流入があったことに加えて、主要な産業部門である木材伐採やアブラヤシ農園開発においてインドネシア人労働者が重要な役割を果たしてきた。

(2)半島部マレーシア

歴史的にスマトラ島などの隣接するインドネシア地域から人の流れがあり、インドネシア系住民は、イギリス植民地統治期までにマレーシアに移住し、インドネシアに出自を持ちながらマレーシア独立の際にマレーシア国籍を取得してマレー人と同等の待遇を受けるにいたった人々、主に農園や工場などで外国人労働者として働く男性、主に家事労働に従事する女性、などのようにいくつかのグループがあり、それぞれマレーシア社会における位置づけが異なる。

これらを通じて、地理的・文化的な近接性のある二国間での移民の送り出し/受け入れをめぐる諸問題について、移民の子弟の教育に焦点をあて、特に移民受け入れ社会における移民の社会統合過程について検討する。

3. 研究の方法

移民の居留国(マレーシア)と出身国/出身地(インドネシア)とを並行して調査し、また、マレーシアにおけるインドネシア人コミュニティ形成の拠点としてインドネシア人学校に焦点を当てる。

現地調査では、半島部マレーシア(クアラルンプール)、東マレーシア(サバ州)、インドネシア(ジャカルタ)の3地域を主要な調査地域とする。それぞれの地域・事例について、文献調査と資料整理、現地専門家との意見交換、関連する団体・政府機関ならびに在外インドネシア人コミュニティへの聞き取り調査という3つの活動を順次進展させる。

4. 研究成果

(1)平成23年度

マレーシアのインドネシア人学校を調査し、マレーシアにおけるインドネシア人学校の形成過程についてマレーシアの華語学校と比較して整理し、その成果を雑誌論文などの論考によって発表した。

東マレーシア(サバ州)で現地調査と資料収集を行った。インドネシア人労働者の滞在期間の長期化や量的拡大に伴い、労働者の子弟の処遇が社会問題となっており、これに対応する形で2008年にインドネシア人学校が設立された。学校設立はインドネシア人子弟の教育にインドネシア政府が対応する姿勢を示したことを意味しており、好意的に受け止められていることを確認した。

また、送り出し地域であるインドネシア、特にスマトラ社会における移動の意味について、災害などの緊急時に社会的流動性を高めることで対応するあり方について現地調査を行い、雑誌論文により発表した。

現地調査と並行して、マレーシアにおける移民・難民受け入れに関する新聞記事を購入し、電子化を進めた。

(2)平成24年度

インドネシアやマレーシアで制作される商業映画作品の中で在マレーシア・インドネシア人やマレーシアの非合法移民、インドネシア・マレーシア間の越境的なネットワークがどのように表象されているかを踏まえて、『地域研究』(第13巻第1号)で東南アジア社会の混成性に注目した特集に参加し、論文を発表した。

東マレーシア(サバ州)でのインドネシア人コミュニティに関する現地調査と、インドネシア(ジャカルタ)における現地調査により、サバ州におけるインドネシア人子弟の教育について、コタキナバル市周辺在住のインドネシア人子弟に対するインドネシア人学校を通じた教育サービスの提供と、州内に散在するアブラヤシ農園のインドネシア人労働者子弟に対する教育サービスの提供の二つの展開があることを整理した。また、サバ州における非合法移民の実態調査のための王立調査委員会設立(2012年8月)や、「スルー王国軍」のサバ州侵入事件(2013年3月)に対するインドネシア人コミュニティの反応や、インドネシア共和国政府の在マレーシア国民に対する対応について資料を収集した。

インドネシア人海外出稼ぎ労働者に関する新聞・雑誌記事を収集し、デジタル化したうえで記事ごとに地名との関連付けを行い、インドネシア人労働者問題の地理的分布を把握するための基礎的なデータ作成を行った。

(3)平成25年度

これまでに収集してきたマレーシアにおけるインドネシア人海外出稼ぎ労働者に関する新聞・雑誌記事(2000-2007年、2011-2013年)をデジタル化したうえで関連する地域ごとに分類し、マレーシアにお

けるインドネシア人労働者問題の地理的分布を把握するための基礎的なデータ作成を行った。さらに、年月日、関連する地域名、第一パラグラフ内のテキストを検索対象とし、検索結果をデジタル地図上で表示するための簡易データベースの作成準備を進めた。

マレーシア人が制作する映画作品が越境や移住をどのように表象しているかを日本社会と比較して検討する公開シンポジウム2件(「境界を越えて撮られる日本と日本人:短編映画に見る3人のグローバル映像作家の世界」「混成アジア映画がつなぐ東アジア世界:『Fly Me to Minami~恋するミナミ』が照らす世界」)を開催した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

Nishi Yoshimi & Yamamoto Hiroyuki, "Social Flux and Disaster Management: An Essay on the Construction of an Indonesian Model for Disaster Management and Reconstruction" *Journal of Disaster Research*, [査読有] 7 (1), 2012, pp.65-74.

西芳実「サバ州のインドネシア人学校」『マレーシア研究』1、2012、p.164。

西芳実「マレーシアとインドネシアの微妙な関係」『マレーシア研究』1、2012、p.170。

西芳実「信仰と共生 バリ島爆弾テロ事件以降のインドネシアの自画像」『地域研究』13(2)、2013、pp.32-33。

西芳実「インドネシア 世界にさらされる小さな英雄たち」『地域研究』13(2)、2013、pp.304-312。

西芳実「マレーシアに問い、マレーシアに学ぶ:越境と相互参照の時代の民族・宗教」『JAMS News』57、2014、pp.9-10。

[学会発表](計2件)

西芳実「戦争の時代から人道支援の時代へ:スマトラにおける異文化接触の変遷から」地域研究コンソーシアム、2011年11月5日、大阪大学。

Nishi Yoshimi, "Social Response to Post-Tsunami and Post-Conflict Aceh: Mourning for the Dead and Healing the Rift.", 第8回国際アジア研究者会議(ICAS8)2013年6月4日、Venetian Macao Resort Hotel.

[図書](計1件)

西芳実『災害復興で内戦を乗り越える 2004年スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』京都大学学術出版会、2014、326頁。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

西 芳実 (NISHI, Yoshimi)

京都大学地域研究統合情報センター

研究者番号 : 30431779